

# *CINEX Web Journal*

」



## 第 2 号

発行日 2017 年 4 月 10 日

- |                         |       |
|-------------------------|-------|
| ★ フィンランド看護教育の現場を訪れて     | 山下 巖  |
| ★ 家事・育児を通して主婦の労働について考える | 渡邊 創一 |
| ★ 惑星的視座から地球を眺める         | 中村 善雄 |

## フィンランド看護教育の現場を訪れて

順天堂大学 教授 山下巖

本学部海外研修でフィンランド看護教育や病院の視察を始めて今年で 5 年目を迎えた。フィンランドでは、看護教育は応用科学大学(university of applied sciences)という高等教育機関が担っていた。大学(university)が学術的研究を主体とし、研究者や高度専門職養成の場であるのに対し、応用科学大学は職業教育に重点を置いた教育課程が組み込まれ実学を重視している。例えば経済学は university で学ぶが、経営学(business)は後者が主に担当する。両者に優劣の差はなく、むしろ 2 元教育として両立させることにより、多様な職業ニーズに上手く対応していると言えよう。

さて、2017 年 3 月、本学看護学部の学生はヘルシンキから約 100 キロ北上したラハティ(Lahti)にある、ラハティ応用科学大学(Lahti University of Applied Sciences)を訪問し、そこでフィンランド人学生のみならず、多様な国籍の看護学生を対象としたインターナショナルクラスの講義に参加した。使用言語は英語である。出自は異なれど、将来看護師を目指す若者同士すぐに打ち解け、互いの学生生活や学業に関する情報交換を行い始めた。時にコミュニケーションに窮すると、電子辞書を取り出したり引率者の私に通訳を依頼したりしながらもなんとか意思の疎通が図れたようであった。

そうした交流からフィンランドの看護教育の特徴が見えてくる。実習授業では、ある学生のアセスメントドールを用いた実習作業を隣室に生中継し、そこにいるクラスメートがスクリーンを見ながらその学生の作業手順についてディスカッションを行うという授業を見学した。スクリーンを食い入るように見ていた学生たちは、実習作業を行っている学生に関するネガティブな発言を一つも行わず、代わりに改善点を多く挙げ、全員で協力してベストアンサーを導き出そうとしていた。授業後、モデルを務めた学生に皆に見られていることが嫌でなかったかどうかと尋ねると、「お互い様だし、明日は私の友人がモデルをやるのでそれを見るのが楽しみだ」と何のこだわりもないようであった。こういった授業は、小学生時から徹底した自律学習やアクティブラーニングを旨とするフィンランド式教育で身につけた個を重んじる主体性が前提となって初めて成立するものであると確信した。

## 家事・育児を通して主婦の労働について考える

(株)岡田製作所 渡邊創一

平日家族と一緒に過ごせる時間は2～3時間ほどですが、仕事を終えて帰宅すると妻と娘二人が一斉に私に向かってその日のできごとを話し始めます。我が家の女性陣は私がどれだけ疲れていても容赦ありません。休日のほとんどは「家族サービス」に費やしており、現在の生活は家族を中心に回っているのが実情です。それでも最近は、専業主婦である妻の方がもしかしたらずっと大変かもしれないと思うことがあります。昨年末に妻が体調を崩した時、朝から晩まで私一人で家事と育児をしましたが、たった二日間で白旗を上げたくまりました。妻の場合は気の合うママ友がいて上手にストレスを発散しているようですが、相談できる相手が誰もいない状況で毎日子育てに追われる日々が続くことを想像してみたところ、発狂している自分の姿が目に見えられました。

話は変わりますが、主婦が働きやすくなるようにとの名目で税制改正が行われ、いわゆる「103万円の壁」が2018年から150万円まで引き上げられることになりました。社会保険にも「106万円（130万円）の壁」があるため、税制改正の効果に疑問視する声もあるようですが、そもそも「壁」が問題になっているのでしょうか。子育て中の主婦について考えるなら、家事や育児の負担が減らない中で長時間労働を望む人がどれほどいるのか甚だ疑問であり、私ならお断りです。主婦に労働を求めるのであれば、まずは家事や育児の負担を減らす対策を考えるべきです。「保育園落ちた」のツイッターが注目されたこともあってか、保育所設置等インフラ整備を進めようとしている動きが見られないわけではありませんが、根本的な解決に至るまでにはまだまだ時間が掛かりそうです。

現在の社会情勢において、労働力確保という以外にも様々な場面で女性の活躍に期待が寄せられていますが、一方で「男女平等」という言葉を都合よく使ってあれもこれも女性に押しつけようとしているようにも感じられます。将来、娘達が気兼ねなく社会で活躍できるよう、頭の良い政治家や官僚の方々には小手先対応ではなく、もっと広い視野での改革を望む今日このごろです。

## 惑星的視座から地球を眺める

ノートルダム清心女子大学 准教授 中村善雄

「グローバリゼーション」や「グローバリズム」といったワードが世に出て久しいが、今なお広く使用されている。しかしながらそれらは、「アメリカナイゼーション」の類語として、あるいはその隠れ蓑として機能している部分もある。グローバルな企業と言えば、マイクロソフト、アップル、フェイスブック、コカ・コーラなど、アメリカ籍のグローバル企業が多く思い浮かぶことから分かる。言語にしたところで、アメリカ英語中心の語学教育は否定出来ない。筆者が英語教育の実態を視察するために訪問したスウェーデンのある小学校では、英語教員としてアメリカ人だけを雇用し、アメリカ英語だけを教えるという徹底ぶりだ。その理由はアメリカが世界一の経済大国だからという至極単純なものであった。もちろん一例をもって一般化することは危険すぎるし、言語では **Englishes**、文化では「サラダボール化」や「モザイク化」といった、複数性を志向する多元主義の動きがあることは無視できないが、通信・交通・流通による地球のダウンサイズ化・ボーダレス化の大きな流れの中で、アメリカの価値観が大きな影響力を及ぼすのは自明の理であろう。そこでアメリカあるいは西洋偏重からの脱却あるいはそれを乗り越える一つの手段として「惑星的思考」という考え方が比較文学の領域から提起された。提唱者は、サバルタン研究でも有名な文芸批評家 G・C・スピヴァクである。この惑星的思考は、乱暴な言い方をお許し願えれば、地球外から地球を一つの惑星として見ることで、国家や文化や人種が形成する境界に捕らわれることなく、これまで看過されてきた他者の存在に着目するという考え方である。文字通り地球を一つの惑星として眺めた宇宙飛行士土井隆雄氏は「アメリカも日本もウクライナもインドも、それらの国がどこにあるかは見えなくとも、この地球が私たちの故郷なのです」と語っているが、経済的・政治的強者は自身の利益のみならず、惑星としての地球全体（人間だけでなく他の動植物も含めた他者を含む）のことを頭に入れながら、真の意味でのグローバリゼーションを推し進めていく必要があるのではないだろうか。